

人が森を創る —森林は文化的創造物—

北村 昌美 (山形大学名誉教授)

山形大学農学部 997-8555 山形県鶴岡市若葉町 1-23

People Create Forest —Forests as Cultural Products—

Masami KITAMURA

Emeritus Professor of Yamagata University

Faculty of Agriculture, Yamagata University, 1-23 Wakaba-machi, Tsuruoka, Yamagata 997-8555

【風景について】

今日の私の話は、テーマが「人が森を創る」です。多くの方が人工林の話でないかと思われるかもしれませんが、確かに人工林は人がつくる林ですので、もちろんそれも含まれますが、それだけの話ではありません。人間と森との関係は、非常に広いいろいろな接触面があり、そのそれぞれで私どもは森のお世話になっているし、また別の面から見ると森の創造に協力していると言えるのではないかと思います。今日は、森と人の共生ということについてお話します。

森と人間の関係はどこに表れてくるのでしょうか。それは風景に出ます。人間は森を風景として認識するわけですから、風景の中から多くのものを読み取ることができます。風景といえば、どうしても街の風景ということをお話ししなければなりません。どこの街へ行ってもそれぞれ特徴のある建物があります。そういう建物を見て皆さんは、この街は非常に個性的だというような印象を受けられるわけで、建造物から入ってくる印象はその街の印象を決定する大きな因子だと言えます。ところが、よく考えてみると街の印象というのは、建物だけでなく、街の佇まい全体が形作っているのです。それがよく表れているのは、例えば絵はがきで、主な建物を題材にして街の表情を外から来た人にわかるようにしているわけです。

何故今さらこのようなことを申し上げるかと言いますと、私どもは長年日本で育っていますと日本の特徴というものを見失いがちになります。ふだん一緒に暮らしている家族と同じことで、例えば家族の中で誰が美人だとか、そんなことは思いません。それと同じように、日本に住んでいると、日本の景色を「何故こういう景色なのか」と考える機会がありません。それがヨーロッパなどに行くと、今までに見たことのない景色にお目にかかるものですから、何故こういう

景色が生まれているのだろうかというようなことを考えます。ですから、こういった問題を取り扱う場合には、外国の例の方がわかりやすいと思っています。

そこで外国を例にその街の表情、それだけでなく街を取り巻く森の表情までどう違うかということをお話したいと思います。表情というのは、単なる建物の幾何学的な景色だけでなく、例えばその街の壁の色や小川の流れ、掃除の仕方や街に落ちているごみまでも街の表情として役立っているわけです。役立っているということは、いい話ばかりでなくて悪い方にも役立つわけであって、要するに街の表情は、人工的に何かを作るということだけでなく、私どもの日常生活そのものが反映していると思わざるを得ないわけです。

このように見ていくと、日本の街の表情はあまり豊かではないというような気がして仕方がありません。特に新しく市街地になった所は、全国どこへ行ってもほとんど同じ顔をしています。

私は、風景を作るのに、特に影響を与えているのは緑の部分でないかと思っています。周辺の森林も含めて緑の部分がその街の表情を形作るのに、あるいはその地方の表情を形作るのに役立っていると思います。

風景にはその街の言うならば心が表れていると思います。街だけでなく田舎もみなそうです。それぞれが単に初めから与えられた山や川などで作られている景色でなく、そこに暮らす人間が作り上げた景色というものが我々の目に入ってくるのです。そのことを一番よく感じるのは、皆さんそれぞれがお持ちになっている故郷です。故郷の景色は他所の景色とどう違うのでしょうか。ただ機械的にあるいは幾何学的に形だけを取り上げれば、故郷の景色は他所と全然違います。

「うちの故郷は見るような景色がありません」というような話をよく聞きますが、有名な山や川がなければ故郷の自慢ができないかということ、そういうことはありません。それぞれの人が自分の故郷に魂の拠り所があるというようなことを感じておられるから他所とは違うのです。

けれども、観光案内書などにはそういうことはあまり書かれておりません。例えば、鶴岡市の東に月山、北に鳥海山、最上川があつてとそこまでは書けます

2006年4月30日受付。

本報は2005年6月4日に山形県鶴岡市の出羽庄内国際村で鶴岡致道大学、人間・植物関係学会および東北芸術工科大学東北文化研究センターとの共催で行われた講演の内容である。鶴岡致道大学および著者の許可を得て、「鶴岡致道大学平成17年度講義記録」から一部修正のうえ転載した。

が、それらは人間があまり関係しない昔からある、俗に言えば神様がお造りになった領域であって、人間が関わった部分がありません。我々が故郷の風景を見て心が安らぐのは、そういう神様のお造りになった地形の問題ではないのです。私どもが関わってきた故郷の風景の中には、街の風景もあるし、周辺の緑の風景もあります。これらが一緒になって私どもの故郷を形作っているのであって、それで皆さんはほかの人には説明できないような感想を故郷に対してお持ちになっているのだと思います。その故郷の景色がどうして心を打つかといえば、そこにはその故郷の持っている歴史や、単なる歴史ではなくて今生きている人々の人情までもが風景の中に染み込み、それが生かされているから私どもは風景を見て感動したり懐かしく思ったりするわけです。故郷のことはよく啄木などの歌にも出てきます。啄木の歌には岩手山がしばしば登場しますが、それは名山だからということではありません。何も名山である必要はないのです。それぞれ名もない山に懐かしさを感じているというのが本当のところではないでしょうか。おそらく鶴岡の人にとって、すぐそばの母狩山や金峰山とかの山々、他所の人が見たら「何だこんな山」というようなものまで心が染み込んでいるわけですから、他所の人には味わえない懐かしさを味わっていると、そういうことだと思います。

このように考えてみますと、風景というのは単なる地形でなく、また植物の固まりでもなく、人間の心を反映したものとして出来上がっているということを強く感じざるを得ないわけです。総合すると、それぞれの地域の風景、特に森林にはその土地の文明と文化が反映しているということが言えると思います。

【森の記憶】

森林に文明と文化が反映しているということがある人が著書の題名として「森の記憶」という言葉で表しています。森はその土地の文化と文明を記憶していますので、そういう森の持っている性格を大事にしないとこれからの森林との付き合いはできないということです。

今日の話で私が申し上げたいことは、森は文明と文化を記憶しているということに尽きます。森は文化的な存在であって、単に有機的な植物の集まり、樹木の集まり、森林法で定義されている森林にとどまらないのです。私どもの認識すべき森というものには文化と文明が投影していて、その森を見れば過去の歴史がわかるというようなことが大事なのではないかとことなのです。人間と植物の関係として、これほど深く広いものはないのではないかと考えています。

このようなことをわかりやすくお話したいのですが、実感としてそれを捉えることはなかなか難しいの

です。ただ森の記憶の中には、割合簡単にわかるような記録的な意味合いというものもあります。例えば、戊辰戦争のときに官軍が最上川の河口に近い清川に来て戦いをしました。その森林に弾が打ち込まれ、その結果杉の木の中に弾が埋め込まれて、後に製材したときに出てきたという話を聞いたことがあります。私は今から50年前に鶴岡へ来ましたが、当時うっそうと茂っていたあの林も今はほとんどないような状態になっています。けれども、このように物理的に森林が歴史を記憶する、これはむしろ「記録」というべきだと思いますが、そういう面も確かにあるわけです。そう考えると、森の記憶というのは大変なものです。このような例を私はヨーロッパで見たことがあります。ドイツとフランスの国境にライン川が流れていますが、第一次大戦のときにフランス側に^{さんごう}塹壕を掘っていて、その塹壕の跡が今でも残っているのです。森林の中に溝があるので「この溝は何だろうか」と聞くと、「それは第一次大戦のときの塹壕の跡だ」と。それを聞いてびっくりしたことがあります。レマルクの「西部戦線異状なし」という作品がありますが、まさにその舞台の、そのとき戦場だった塹壕の跡が残っているといたようなことが森の記録する能力としてあるわけです。森が成育していく過程でいろいろと歴史的事実を取り入れていくと、全体として森の中に文化や文明の記憶、単なる記憶でなくて記録という形でそれが森に再現されているというようなことを感じるわけです。

また、こういう例もあります。ローマ時代にローマがヨーロッパ中の街々を席卷して、それぞれの街にあった独自の文化を破壊したが、その破壊を免れるのに役立つのが森であったと言われていました。森林を失くして、そして街を占領してしまうと何処もかしこも同じ顔をした街が出来上がり、日本の新しい市街地の表情みたいに区別がなくなってしまう。文化を守っていた森林が失くなったために、街の個性的な表情が消されてしまって何処の街か見分けがつかないようになるというようなことが実際にヨーロッパでは起きているわけです。私もそういう体験があります。ドイツへ行って旅行をしていて「さあ着いた」ということで、ある街に泊まろうとしたら何やらおかしい。あまりにも街の顔が似ていたため、間違って別の街に泊まろうとしていたのです。そこは一つ手前の街であることにホテルへ入ってから気づき、慌てて次の街へ移動しました。このように歴史的な街の個性まで潰してしまうような猛威をローマは振るったということなのですが、そこには森が介在して森の役割を果たしてきたということがあまり知られてはいません。

このようにして、森林にはそれぞれの土地の個性による文化、そしてその時代が反映しているのです。時代が反映するということは、例えば我々は第二次大戦

を生々しく記憶しておりますが、その影響というものが世界中に及んでおります。それも一種の戦争文明、いや非文明の痕跡なのです。このような例はたくさんあって、そういうようなことを繰り返すうちに、次第次第に森が文明の記憶を自分の中に貯め込んで、我々はその森の姿を見ているという格好になっているのです。それに対して今までは、あまりにも森を生産の対象として見過ぎてきたと後悔せざるを得ません。

文明、文化の投影ということで森林を見れば、森林の深みがまたなお一層大きくなります。それをあえて逆の方向へ動いたのが、明治維新時の廢藩置県に伴って起きた国有林の創設です。国有林は手っ取り早く成果を上げるために、画一的に森林を取り扱いました。だから、今、日本中どこへ行っても我々の目に入るのと同じ年齢の針葉樹の一斉林、つまり同齡林が普通の景色になっていて、それぞれ違っちがった表情を持っているはずのものが消えて画一的な風貌ふうぼうになっているのです。これが国有林政策の大きな失敗であって、我々はこのことを教訓にしなければなりません。

それでは、どうやって森林に文化と文明が反映していくのでしょうか。森林と文明・文化の間に人間がいて、文明・文化の記憶に形を留めるための努力をしている。それが一面からいうと林業という立場でもあったのです。今は林業という生業なまわざはだんだんと廃れてはきましたが、とにかく人間が技術でもって人間の文化の問題と森林の生態とを結びつけるというような役割をしてきたわけです。そのことをちょっと申し上げた

と思います。今までの日本は森林は収益第一でした。これは哲学者のデカルトが森は儲かるという話をしてから、経営の対象として林業が成り立つことが提唱されました。それ以来森はそれほど神聖なものでもなくなり、だんだんと昔あった高い地位から落とされて、収益第一ということになったわけです。その収益のためにいろいろな技術的な手法も提案されてまいりました。

しかし、最近になって収益第一から方針が変わり、森林は今まで木材を収穫するだけの場所だと思われていたのが、木材も収穫できるがそれ以上に森林が存在する価値について考えられるようになったのです。これも人間の文明の推移です。一例をあげれば、森林は生物の多様性維持のための非常に重要な場所、そういう機能を持っているということです。最近では、地球温暖化を防止する力があるといったようなことが木材による収益よりもはるかに大きく取りざたされています。公益的機能、例えば土砂扨止とか、森林が人間の環境を守っているなどといった面が強ク出されるなど、森林に対する見方は今変わってきているのです。この変わってきたということ、これが文明の反映です。

とにかく皆さんには、森林には文化、文明が投影しているということだけはお忘れにならないようにということをお願いしたいわけです。そもそも森林というのは、そういう文化的な存在であったはずですので、そのことを認識していただきたいと思います。